

2018年2月

変身ものがたり

ちくま文学の森より

眞鍋由比

来月の読書会の課題図書は『山月記』。

ですから昼休みや朝、『山月記』の朗読CDを図書館でかけています。25分だから、じっとしていれば聞ける長さ。3月に文豪ストレイドッグスの映画が公開されるので、その関係もあり、ボランティア司書さんたちが『山月記』を課題図書に選びました。

虎になった男のパロディとしては森見登見彦のものは京大でずっと留年し続けて小説を書き続ける人間が天狗になってしまう話になっていて、ちょっと馬鹿だけど悲しい結末になって同情してしまいます。

柳広司の『虎と月』は虎になったということをもとに、息子が虎になった父をさがして父が目撃された山村まで旅をし、そこで出会う真実は…としゃれたミステリに仕上がっています。正義を貫いた父の話は小気味よく楽しいのですが、原作のうら悲しさとはちょっとはなれている印象です。。

さて、世界の文学でもほかの動物に変身する例はあります。動物ではないけど毒虫に変身するカフカの『変身』は朝、疲れた営業マンだったグレーゴル・ザムザは毒虫になっていた、という驚愕の事実を淡々と描写していきます。虎になった山月記の主人公は、傲慢だったから虎になったという、罰を受けて変身したようになっていますが、ザムザに関しては、家族思いの勤勉なサラリーマンで、罰を受けるようなことは思い当たりません。どうして、虫になったのか。虫になんかなって可哀想…という悲哀が普通の受け止め方なんだと思います。けれど先日NHKのEテレで俳優の香川照之さんがやっている「昆虫すごいぜ」を見ていると、この人はきっとある日、虫になっていたら、大喜びなんだろうなと思いました。「すっげー、俺、虫になってる。飛べる、飛べるぜ！」と有頂天になるかも。いろいろな人にはいろいろな価値観があるから、面白いと思います。

それ以外にも変身物語でエーメの『壁抜け男』というのがあります。フランスの役人で、毎日真面目に務めていたのですが、43歳の時、自分が壁抜けができると気づきます。上司がかかわって意地悪されるようになり、ストレスがたまって壁抜けの術をつかって、上司の部屋の壁から頭だけ出して嫌味を言うって、上司が彼の事務室まで見に行くと普通に仕事をし、ということを繰り返しているうちに、上司が心を病んで、転勤し、一安心。それから壁抜け男は銀行やお金持ちのお金を盗んで英雄扱いされるのですが、周囲に英雄だとわかってもらえなくて、わざと警察に捕まったりします。けれど、もちろん壁がぬけられるということは、脱獄できるということでも…刑務所もこわくない。ところが彼は人妻に恋をしてしまいます。夫が留守の時にその愛しい人の寝室に壁を抜けていくのですが、夫が途中で帰ってきてしまいます。そして思わぬことになるのです。ちょっと切ない結末なのですが、これはこの『ちくま文学の森 変身ものがたり』のなかのオノレ・シュブラックの『失踪』とよく似ていて結末がかなしい。人妻を寝取ったりしてはいけないという常識を教えるための説話なのではないでしょうか？

こちらにはゴーゴリの『鼻』も載っています。ある日、小役人の鼻がとれてしまって、役人に変身してしまったりするんです。しかも元の役人より上等の。鼻が取れて人格を持って逃げ出して、人を騙して歩くなんて、すごい話。しかも最初、床屋さんがパンのなかからその鼻を見つけることからこの話ははじまります。パンはよく焼けているのに鼻は焼けていない。それにどうしてうちのパンに常連客の鼻がまぎれこんだのか、それもよくわからない。芥川龍之介の『鼻』もそうですが、プライドが高すぎる人への罰が鼻の変身ということになるのでしょうか？

鯉になった和尚さんもでてきます。コウノトリになったカリブも、フナになった少女もでてきます。変身とは傲慢の罪ゆえに身に受ける罰のようなものなのではないでしょうか？もし、『山月記』の主人公が、虎になったことを喜ぶ価値観を持っていたら悲劇にはならなかった。いや、それならそもそも虎にはならなかったのか。